三河アララギ

２０２２年 令和４年６月 水無月（みなづき）

六　月　号

第 六十九 巻　第 六 号

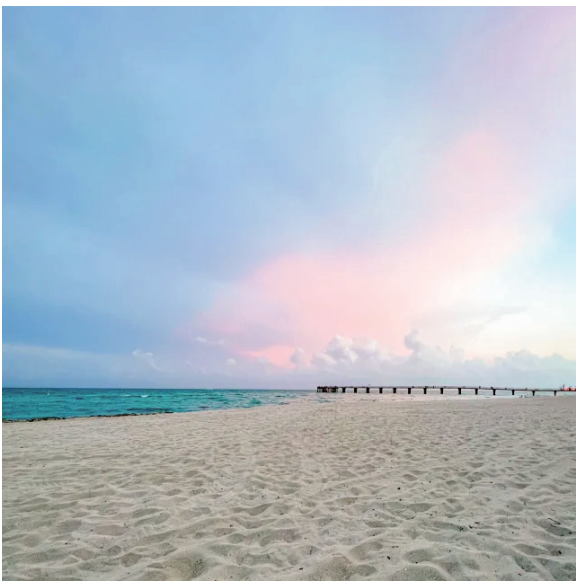
ニューヨーク日記（188）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

MIAMI SKIES

Blue Shoe Diaries



この空、景色、綺麗だよね。ここはマイアミの我が家からの景色で一番お父さんに近い所です。ここに居る時はなんだか時間がゆっくり経っていて世の中の心配事などを少しだけ預けておける様な気になる所です。マイアミはアメリカなんだけどなんだか南米にいる気分で英語よりもスペイン語が聞こえてくるし、アルゼンチンの子供の頃の味が当たり前のようにどこの近所でも食べれちゃう。朝ごはんにファクトゥーラ（色々なデニッシュやクロワッサン）、お昼にサンドイッチ・デ・ミーガ（トーストしたやつがいい！）、夜はアサード（ミックスグリルで！）。ここでちょっとお休みしようかな。

Isn’t this sky amazing? This is our view from our home in Miami where we feel closest to dad. It’s where time seems to pass at a much slower pace and where you can set aside all the worries of the world while here. Miami’s culture is very Latin or South American that we hear more Spanish than English and we get to have all the flavors of our Argentine childhood practically everywhere. Facturas for breakfast, sandwich de miga (tostado!) for lunch, and an asado (parillada!) for dinner without leaving the neighborhood. I think we’ll take a little break here.

目次

第六十九巻第六号（通巻八二二号）

表紙・絵具　御津　磯夫（1）
ニューヨーク日記（188）　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「續々草々」　今泉　米子（5）
茅場町また亀戸・九十九里　夏目　勝弘（6）
夕焼け小焼け　岡本八千代（8）
花見日和　弓谷　久子（10）
森羅万象　今泉　由利（12）
仏の座　安藤　和代（14）
満開　山口千惠子（16）
信州穂高　清澤　範子（18）
繕ひて　杉浦恵美子（20）
あけぼの　伊藤　忠男（22）
根尾の桜　白井　信昭（24）
彼方此方　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ　伊藤　晴江（28）
三田美奈子（28）
水野　絹子（28）
牧原　規惠（28）
稲吉　友江（28）
鈴木美耶子（29）
吉見　幸子（29）
牧原　正枝（29）
森　厚子（29）
山崎　俊子（29）
現代学生百人一首　東洋大学
亀谷　由衣（30）
相川　海己（30）
奥冨莉緒菜（30）
杉本　陽（30）
石井　芽依（31）
村上麟太郎（31）
石井　美咲（31）
高濱　莉奈（31）
「ああ国連平和の鐘は鳴る」「釣鐘草の歌」　高橋　育郎（32）
植村　公女（34）
木村　歩歩（34）
今泉　如雲（34）
今泉　由利（35）
矢崎　直人（35）
『俳句』
『酔いの徒然』（122）　丸山酔宵子（36）
楽しい時間（115）　山本紀久雄（38）
絹の話（139）　今泉　雅勝（40）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（42）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（44）
初狩便り7　花野みぶり（46）
『少子高齢化』　中屋　保之（48）
退院して台桜を賞す　桜台楼主人（50）
平原（パンパス）　今泉　由利（52）
康鍼治療院　玄　翁（54）
「氷魚」のことから（256）　岡本八千代（56）
編集室だより　今泉　由利（57）
「三河アララギ」について　（58）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

大寶といへる二年の二月六日はじめて海苔といふ文字あり

光なきさざ波の寄る池水に傾く榛はまだ冬木なり

夜の空を見ることすでに無くなりし我を五日の月に呼ぶつま

擬寶珠の古花梗の倒れ伏してわれに一冬のまた過ぎゆかむ

庭の隅に据ゑたる甕のめぐりには冬しのぎたる苔青みたり

裏庭の木立にしばしば突風のごとき音あり春ちかづきぬ

甦(よみかへ)りし去年のごとくに鉢植ゑの櫻桃(あうたう)の花さきさかりゆく

沈丁花ひともと赤くひろごりて茂吉之墓の文字はかはらず

アララギのいたくは伸びずその葉さへ凍みいろにして年のすぎにき

春あさき曇りに土はかげもたず匂ふよ紅梅沈丁花の赤

歌集「續々草々」

今泉米子

蹲(つくばひ)の苔乾きつつこの年も楚(すはえ)に花の八重の紅梅

祖母より母より享けし知恵のありわれの一生(ひとよ)の窓の紅梅

もの言ひもまれまれにして夕つ日に八重紅梅の紅はなやぎぬ

枝撓むほどに鴉の大きくて柿の梢はまだ冬木なり

思ひし事なしとげし事も確(たしか)ならず我には早く過ぎてゆく日々

仕立直すと着物解きをり極まれる己が齢を己忘れて

鴉鶯ひよどり百舌鳥と巣造りにぎはしきかなわが屋敷森

苔の枝に八重紅梅の花みちて花明りせり高曇りつつ

蹲(つくばひ)に浮べる紅梅の花びらのおもひのごとく片よりにけり

侘助の花までゆかず引返すまた今日も何かおもひだして

茅場町また亀戸

夏目勝弘

伊藤左千夫の住みゐし跡を探さむと錦糸町駅案じつつ降りる
昔からここに住みゐしか先づ尋ね今日幾人目ぞ職人に聞く
本所にて八十余年のコーヒー店に聞けばわかると古戸を引きぬ
区役所に携帯かけて五分待つ錦糸町駅のすぐ前なりと
二万歩を探し巡りしも無駄ならず松倉米吉の住みゐし跡みつく
天満宮に梅見る老いに声高め左千夫の墓はと繰り返へし聞く
膚色のあせし小振りの御墓にはまだ新しき花供へあり
墓石と塔婆たち立つ間より曇りと同色東京スカイツリー
子規ほめし牛飼の歌のその歌碑はシロの繁りに隠れてゐたり
胸までの洪水のなか両国まで牛ひき行きし跡を辿らむ

九十九里

指すべらせ携帯あやつるが多くして上総一ノ宮への車中にをりぬ

故里の九十九里にたびたびに安らぎ求めし左千夫し思ふ

打ち寄する波は渚の砂に消ゆ消えゆく音を聞くも再び

海神（わたつみ）の沖より寄する今日の波恐れおののく波にはあらず

師を越ゆること出来ざると歎げかひし文明の一首忘れられざり

久方の空をうめゐる今日の雲太平洋の小さく狭ましも

海風の冷たく吹きつく砂丘の蔭にしばし佇み歩みを止む

波消しに砕け飛び散る波もあり渚に消ゆる波もあるなり

引きゆきし波はたちまち寄する波左千夫めぐらす九十九里浜

九十九里の遥けき沖に近海に往き交ふ船影みることのなし

夕焼け小焼け

蒲郡　岡本八千代

夕焼けは小焼けに暮れてしまひたり急にさびしくわれはなりつつ

友だちに孤独が好きとわれ言へど変な心と悲しみてもをり

つひにつひにベット生活のわれにして細く開けたる北窓の景色

今日もまた北窓開けて風通す北より吹きて南へとゆく風

また今日もベットより見る北窓の景色は雨ふる暗がりの空

珍しくデーサービスとやらに来てみれば窓に広がる渥美半島の海

渥美半島の上の空には白雲がぴかっぴかっと光りつつ動く

四月になりてまたもや雨と曇りの空ベットに入りてもの書きをする

老いてくるプロセスとはこのことかとしわしわ茶色の細き腕を見る

おおよそにわが白き腕白き足も失われつつありわが寂しさよ

三十歳になりし孫セイジより贈り物届く此度は甘きプリン一箱

また机に小さき紙切れ置きてあり「人よ人よ誰か来てくれ」の

空色の今日のみ空を眺めつつお八つ時間を待ちゐる私

いつしかに子供のやうになりつつある己れに気づく今日のあはれさ

哀はれなる女（をみな）よ女此の夜半も誰とも語らず静かに眠らむ

花見日和

豊川　弓谷久子

花見にと子に誘はれぬ坂道の木立の中を車は登る

山上の桜広場の花の下今年の花見は御津山ざくら

満開の桜広場は人影まばらうぐいすの声時折聞こゆ

山頂より見下ろす我が町御津の町波静かなり御津の浜

家族写真今年も撮りぬ子と孫の間に小さき我が立つ

幾度かの御津山歌会今は亡き先生先輩友を憶ひぬ

我が身にあと幾度の花ならむと詠みしが最後の歌会となりぬ

最高の花見日和に今年も逢えて心置き無く山を下りぬ

挿し木より子が丹精して育てたる椿の花が咲き始めたり

楽しみて皮をむきをり掘りたての筍今年も金野より届く

裏庭にマーガレットの花咲き初むる故郷の山に咲きゐし花よ

墓じまいのあの日父母の思い出にと一もとこぎ来しマーガレットの花

侵略を正義と訓え込まれたる昔を憶ふニュースを見つつ

天長節と呼ばれし祝日昭和の日となりて始まる黄金週間

さまざまの世間を渡りて来たるかな昭和と共に生まれ育ちて

森羅万象

東京　今泉由利

飛鳥なる釈迦如来像の右の手の縵綱相のなぜか甦ふ

「止まりさえしなければよし」孔子の教へに従がひてゐる

自のほんの少しの体験に凡てのことを推し量りをり

太陽の寿命はおよそ百億年五十億年残りてゐるよ

真地球より湧き出づ水の醸されて今日の私の一献

桜かなスモークチップの香の動くヤマメ薫製運ばれきたり

アスティカの時代にはすでに有りといふチョコレートひとかけ口中に

地球儀をまわしまわしてここはどこ宇宙遊泳しているつもり

左手に宝珠をそっと乗せたまふお地蔵様は私を救済中

自の足もてどこどこ歩みゆく自由といふを持ちあはせをり

読む読まぬことには思ひ至らざり積みあがりゐる本本本本

従横も空間もあり時空にてひとりのひとを偲ひてやまず

新しく我家となりぬ家中に私の玩具等饒舌にあり

アマゾンの木々より成りぬ玩具にて一念三千森羅万象

とっとっと巡り来たりぬ地球の上を今日の安楽私に仕舞ふ

仏の座

豊川　安藤和代

うららかや杏子の花の蜜を吸う目白三羽の動きたおやか

春を呼ぶ雨と思えば窓を打つ音すら楽しタンゴに聞こゆ

長生きはしたくないねと言いつつも接種後の熱にたじろいでおり

集まればそれも美し仏の座野は絨毯の紫つづく

雛の口にも未だざる指の傷なるに消毒の度ズキーンと痛む

「首相の一日」吾れ知ったとてどうなるでもないのに今日もくり返し読む

下七文字まとまらず心乱るるに庭の杏子は楚々として咲く

暗い記事あまだあふるる今の世に負けてなるかと朝顔を蒔く

オカリナを遊び心にチャレンジす〝故郷〟の曲吹けて快晴

夕づけば夕焼け小焼けの曲流るこの平安の町豊川が好き

肉嫌いの吾れの調理の十五年いつしか肉巻き十八番となる

庭木々の芽吹きの光る雨上り何かいい事ありそな気ぞする

咲き初めし桜をぬらす今日の雨明日の予報を重く聞き入る

日付文字褪せしビンには亡き嫁の漬けいし梅の色深くあり

思い出は遠くなる程色の増し香りも増してこの春も過ぐ

満開

豊川　山口千惠子

満開の無住の寺の桜の木自転車止めてしばし眺める

昨夜降りし雨に散りたる桜花ぬれし地面に白々として

満開になりて静もる桜の木花びら舞ひぬ時折舞ひぬ

今年咲く花房長き藤の花鮮やかな色はや色あせぬ

花咲ける隣りの家のリラの花塀ごしに見るうすむらさきの色

花咲かぬ君子蘭の鉢玄関に気付けば時々水そそぎやる

四国より太き筍届きたり高知新聞にくるまれてをり

米糠を入れて筍ゆでており遠く高知の地思ひつつ

ゆで上がる筍白く手に重し冷たき水に浸しおくなり

供へある色鮮やかな墓花は皆造花なり近づき見れば

朝早く部活指導に行きしとぞ春より新任教師となれり

瓶にさす沈丁花の小枝花散りて青き芽出づる枝先より出づる

ワクチンの予約の日付け書きしメモ貫ひて医院を出でて来にけり

忽ちに桜の花の季も過ぐ山はみどりに落ちつきにけり

散らばれる瓦礫の中のぬいぐるみテレビがうつす戦場の様

信州穂高

春日井　清　澤　範　子

吾は朝毎赤青黄と十二種の薬をのみて朝が始まる

堤防の桜を見むとシルバーカー押して見るなり満開の桜を

暫らくは満開の桜の下にゐるボンボリゆれて快適なお花見

庭の千両は細いながらも生きぬいて枝曲れども風に揺らぐも

亡夫の好きな薩摩芋なりベニアズマレモン煮にしてお供えをする

剪定し始めての赤白混じりの椿花思いっきり咲きハラリと散りぬ

亡夫（なきつま）の一周忌法要を信州穂高の青原寺にて

一周忌の日は近づきぬいよいよお別れ娘と共に最後の段取り

夫の死の悲しみからはぬけ出せぬ娘ははらはら涙をながす

二人だけの生活時には淋しくも吾も涙をこらえて家事を

娘も吾も腰痛の病い持ちをりて掃除機かけるもままならぬこと

繕ひて

蒲郡　杉浦恵美子

ソーラーの首振り人形の友の見舞ひの品ぞ十年ゆらゆら

主は疾うにこの世に居ぬのにソーラー人形ゆらゆら揺れて思ひ出誘ふ

我が友と花見に山里萩へ行く其々幼時の思ひ出のあり

我が友の萩の帰りは自転車の伯父の背といふ何しろ辺鄙

今は萩結構開けて山間に新東名が見えたりもする

せせらぎの畔の桜の大樹下だあれもおらぬ友と我のみ

もう蛙鳴いているよと友が言ふ話に夢中の我を止めて

手に入れし古本劣化が烈しかり読んでる内にふたつに割れぬ

古本がふたつに割れぬ繕ひて読み続けたり絶版なれば

繕へど割れたる背の部が頼りなし我が読みし後は誰も読むまい

若き頃高群逸枝に準へて勉強せよと我が夫言ひけり

この夫婦我が夫理想としたのかしら高群逸枝を支へし夫

半世紀過ぎたる後は高群逸枝振り返る人ももはや居るまい

とは言へど家族基本の婚姻の歴史は初めて高群より知る

雨上がり日曜午後の春愁は高群逸枝を読み終へし所為

豪華には

大阪　伊藤忠男

朝４時に起きて厭わず弁当を作る家内に頭が下がる

何あるも今ある我は家内ある故なるゆえや感謝あるのみ

黒雲に覆われ辺り真っ暗に戸締める間無し雨窓を打つ

窓軋み吹き荒れたるや春嵐夏へと変わる兆しなるかな

見る見るに雨水流れ川となる春雷夏に橋かけたとて

歌作る心は純みし時なりと今は静かに目を閉じるなり

我が母の手塩にかけし牡丹花蕾付けたる七回忌過ぎ

あと1人原稿まだか来る来ぬか割り付けできず胃が痛くなる

花も散り若葉芽を出す卯の月も靄がかかりて先見通せず

銃弾の中に一輪赤い花風に揺られて何語るのか

何よりも命の重さ貴きと言うは呪文空々しきや

殺戮も戦争ならば赦される理不尽なことこの上無しや

昔われ自然に触れた知床の海に悲恨と怒り渦巻く

じわじわりコロナ増えるが気がかりに咳のみだとて辛きものなり

八重桜同じ枝咲く祝い花赤白揃いおめでたきかな

根尾の桜

豊川　白井信昭

この月も孫匠真と妻伴いて春麗（はるうらら）かなるラグーナに遊ぶ

桜咲く尾根見渡せる観覧車我には一代（ひとよ）まわれよまわれ

窓よりは潮下げゐたる浜名湖の湖張（うみ）られし青き海苔網見ゆる

相楽なる山田のデコポン頂きし従兄の良興（よしたか）さんありがたきかな

孫を乗せ妻を伴い午後の日を寝かせむと行く渥美半島

久久に走り来たりぬ表浜砂浜つづくロングビーチ

後席のチャイルドシートに身を包め孫は静かにまどろみている

向かひ立ち太平洋の大空に両手をあげる深呼吸する

一つ道浜に沿いつつ黄昏(たそがれ)の恋路ヶ浜はもう近からむ

孫と妻伴いて行く一宮の大和の大公孫樹(おおいちょう)芽吹ける卯月(うげつ)

行き帰り砥鹿神社の道の辺に欅大樹は裸木のまま

古の赤乃赭船(いにしえあけのそほぶね)の泊(は)てし地と麓より上がる御津山頂(いただき)

根尾村よりわが里御津に贈られて接木の桜三十(みとせ)年過ぎたり

散り際を薄墨色に変わるらしこのひとつ桜うばひがんとも

三河湾国定公園御津山の咲き残る桜愛(め)でつつ降りゆく

彼方此方（あちらこちら）

東京　矢崎直人

淀橋や群れに混じりて白い鳩羽根毛むくじゃらとさかまである

カラスどのバス停の屋根行水す都会も真ん中まさか新宿三丁目

睦橋（むつみばし）熊川軌道砂利運ぶ多摩川の砂利鉄道の道

乗る人が一人の立川バスに乗り貸し切りのバス駅まで走る

散る花の海に漂ふ神明社鳥は桜の海を唄へり

古里駅（こりえき）を歩いていけば熊鈴の一つ春風鳴らしてゆけり

しだらくの橋が藤蔓だったなら僕は怖くて渡れなかった

ダムと城　石の白さや白き空　みずうみみんなみんなみずうみ

踏む枯れ葉人の気無くて誰の踏む眼凝(まなこ)らせば猿(ましら)動いて

見渡せば此処(ここ)や彼処(かしこ)に猿のいて彼方此方(あちらこちら)で毛づくろいして

春の日の散歩の道の草花の日に日に増えて歩くの楽し

図書館のあと十分で閉まりけり気づいて風に逆らい走る

春夕焼坂駆け下りて駆け上がる北大塚の子らに抜かれて

日の習い心に安堵もたらせり朝昼夕にお稲荷様に

短めの散歩を終えて帰る時さらさら春の雨降り始め

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

我が息子の一人暮らしの荷物載せ走りゆく車ただ見送りぬ　伊藤晴江

転任の日六年女児より手紙受く「先生みたいな大人になりたい」と
えんどうの白き花咲く明るさよ吾が孫ふたり卒業の春　三田美奈子

それぞれの道への合格発表を待ち侘びてをりこの春の日日
明日のオペ待つ我のもと友からの「私もステージ４」との知らせ　水野絹子

子も無くば六十五迄を働きてこれより老後と思ふ間も無きか
義務教育終へし孫等の成長に嬉しさ寂しさ入り混じりつつ　牧原規惠

書写山の圓教寺にて静寂に染み入るがごと読経の声は
干し物を取りに二階に上がり来てしばしの間夕陽見てをり　稲吉友江

華やかに咲く花々も好きなれど路傍に咲くも可憐と思ふ

咲き残る白バラ三つ四つをながめつつ呼び鈴押せばはや友の声　鈴木美耶子

聞こえくる「小さな世界」のこの曲よ孫との思ひ出ディズニーランド　吉見幸子

孫娘七歳になりてのひな飾り初着もひなも私の物よと

見上げたればわがしだれ梅の白は咲き今日の空中青空の中　牧原正枝

満開の河津桜よ前の畑けさ突然にドラマ撮りをり

ｗｏｗｏｗのドラマの名前わからねど「君の河津の桜が写るよ」と　森厚子

髪をあげて美容院にて対面す鏡の向かうに母のゐる如

初めての猫を迎へる知人宅の話に花咲く吾が家の夕餉

本を読むとなりにいつも眠る猫今日はどこへか行きてしまひしか　山﨑俊子

打ち寄せる波のみぎはに冬鳥の数も少なになりてをりたり

現代学生百人一首

東洋大学

気付いたら午前一時をすぎていたああおそろしい本の力よ

さいたま市立宮前中学校二年（埼玉県）　亀谷由衣（かめたにゆい）　14歳

生き方を教えてくれたおじいちゃん最後の教え人は死ぬこと

狭山市立堀兼中学校二年（埼玉県）　相川海己（あいかわかいき）　14歳

あんなにも熱く悩んだ片想いどこに置いたかまた夏が来る

狭山市立堀兼中学校二年（埼玉県）　奥冨莉緒菜（おくとみりおな）　13歳

久々に着た制服の窮屈さ自粛期間の長さを語る

狭山市立堀兼中学校二年（埼玉県）　杉本陽（すぎもとよう）　14歳

友達が「ピエん」と嘆いたテスト返し返され私は「パオん」とつぶやく

西武学園文理中学校三年二年（埼玉県）　石井芽依　15歳

学校のリモート授業寝落ちして起きたら画面に僕しかいない

西武学園文理中学校三年二年（埼玉県）　村上麟太郎　15歳

待つ人がいるから毎日病院へがんばる母にエールを送る

いすみ市立国吉中学校三年（千葉県）　石井美咲　14歳

「まだまだだね」からかっていた君の背は「まだまだだね」と私をからかう

芝浦工業大学柏中学校三年（千葉県）　高濱莉奈　15歳

ああ国連平和の鐘は鳴る

高橋育郎

朝な夕なに　鳴る鐘は
あれは国連　平和の鐘よ
世界平和を　誓う鐘
二度と許すな　戦争の惨禍
命の尊さ　守るため
聖なる鐘よ　とこしえに

澄み渡る空　果て遠く
鐘の響きは　地球を巡る
世界平和を　祈る鐘
生きとし生きる　すべての命を
守り続ける　あの鐘に
感謝の気持ち　伝えよう

ああ国連平和の鐘よ
歓喜の歌を　こぞって歌おう

童謡　釣鐘草の歌

高橋育郎

釣鐘草の花が咲いたよ
色は三色　三色すみれ
形はすずらん　こうべを垂れる
感謝が花言葉　そして誠実おもいやり
風鈴草とも　呼ばれているよ

そよ風に揺れて　チリリンと
やさしい音色　可憐な花よ
きょうの平和に感謝を捧げ
あしたの平和に思いを込める
ああ　釣鐘草の　鐘の音よ

『俳句』

新しき地蔵の帽子青蜥蜴　植村公女

弁護士の茶髪の乱古扇

野良猫のひっそり隅に新樹風

木漏れ日に休み休みの蓬摘み　木村歩歩

うたた寝や下手なうぐいす里の昼

桜咲き戸口に積まれし段ボール

亀鳴くや八幡宮の夕参り

隣人の逝去も知らず弥生尽

江戸彼岸桜や陸奥（みちのく）の寺に
津軽ではまだまだ薩摩から花信
古雛や北前船に乗り来しと

今泉如雲

質量のかすかに見えて桜散る
花びらは私に散る君に散る
虞美人草芥子坊主となりました
使命あり種大根の白い花
ささ波の消えゆくところ蘆若葉

今泉由利

拝島のつばめつぎつぎつぎつぎと
春の風拝島なだら山連らね
春の蝶小さな畑飛び交える

矢崎直人

『酔いの徒然』（一二二）

丸山酔宵子

『油絵事始め』

下手な油絵をはじめて、かれこれ４０年を過ぎた。

狂ったように、突然油絵を始めたのは、日本経済のバブルが弾け、今にも倒産しそうな小さな貿易会社を経営し、毎日手形決済のための金策で、血相変えてバタバタ走り回っていたころである。やっとのことで手形決済が終わると、刹那的満足感で、やれ銀座だ、赤坂、六本木と飲んだくれ、翌日は決まって二日酔いで目を覚まし、虚脱感と脱力感にさいなまれるのである。　夕刻には正気に戻ると、また迫って来る次の手形の決済と、凄まじい日々を過していたのである。

「俺は、果たしてこんなことでいいんだろうか・・・」その時、朦朧とした頭に、啓示のように浮かんだのは、小学生の頃、小さな炬燵に入りながら、無心にクレヨンで絵を描いている姿であった。

「よし、油絵をやってみよう」と、躊躇なく画材屋に行き、油絵道具一式、イーゼル、キャンバスも含め全てそろえて猛然と挑戦したのである。初心者向けの油絵の基本ブックを買い込んで、恐る恐るキャンバスに向かうのであるが、当然ながらなかなか思うようにはうまくいってくれない。生来の酒好きであるから、生意気にもワインやウイスキーのボトルを題材にすることが多いのだが、グラスやデカンタを描くに至ると、透明感を如何に表現していいのかがわからない。当初は、白で塗りたくって、無理やりデカンタやグラスに仕立てたが、これは如何ともしがたい。

絵を描き始めるとどういう訳か頻繁に時間があれば美術展に行き、出張で外国に行けば必ず主要な美術館にはしばしば足を運んだ。また、銀座での打ち合わせの前後に時間があれば、必ずふらっと画廊を訪ねることが多くなった。「そーか、グラスの透明感を出すのは、向こう側を描けばいいのか。陰にはいろんな色が反映していて、単なる黒じゃないんだ・・・」

それから２０年。いずれの師を持たず、徹底し我流で，ボトル、グラス、花、風景等を好き勝手に描き続け、ちょっとした美術展でも連続して入選するようになってきた。

行きつけの銀座のバーでも「ヴィンテージ・ポートワイン」の小品を飾ってくれていて、修行中のバーテン

ダーが「私、この絵が好きなんです。毎日ボトル掃除とグラス磨きの後、この絵のほこりを払ってきれいに拭いてます」などと言われると、「そーか。君が店を出したら、かならず俺の絵を開店祝いにプレゼントするから・・」等と言って、一人悦に入っていた。

そんな頃、中高時代の恩師から同窓会の席で、「君・・・。なかなか絵、うまいんだね。今度私に君の絵呉れないかね。お金はちゃんと払うから・・・」。「先生。お金とは滅相もない。喜んでプレゼントしますから・・・」。後日、Fゼロ号にヴィンテージポートとデカンタの小品を古びた風格ある額に入れて送ったところ、数日程して、お礼状とピン札1万円札が10枚送られてきた。

「先生。私の絵は号1000円もしない拙作なのに、こんな大金頂けません」とは言ったものの、数日後、酒とともにあとかたもなく消えてしまったのであるが・・・。その恩師も既に鬼籍にあるが、葬儀の席で、ご子息が、その絵は先生の書斎の机の上に飾ってあったとのことであった。

現在も飽きることもなく遊(すさ)びとして、ゼロ号から100号まで描き続けている。数年前には鎌倉や自由が丘で細々と個展を開いたりもして、義理でお買い求め頂く殊勝な方もいるのである。

現コロナ禍、外出する機会もめっきり減ってきたが、週に2～3日は所用で銀座に出没し、ロードショーを見た後の飲み屋と行きつけバー通いは続けている。その行きつけバーは銀座で3軒、自由が丘、都立大で1軒ずつで、皆、拙作が恥ずかしそうに照れくさそうに掲げられている。

ヴィンテージポートを描く春の宵
朱に赤重ねるツツジキャンバスに
パレットの緑の濃さ増す五月かな

酔宵子

楽しい時間　115

2022年4月30日

山本紀久雄

九代目市川団十郎・・・其の二十一

九代目市川団十郎の連載を終えるに当たって、浅草寺の九代目「暫」銅像、九代目の文化切手、団十郎銘入り包丁についてお伝えしたい。

1 浅草寺の九代目「暫（しばらく）」銅像

浅草寺の本堂裏広場に九代目の「暫」銅像がある。

浅草観光連盟会長であった森田新太郎氏が『九代目市川團十郎「暫」銅像の復元建設』と題して『月刊信用金庫』（1987年1月号）に寄稿しているので、掻い摘んで紹介したい。

再建された九代目市川團十郎の「暫」銅像の除幕式が、昭和61年（1986）11月3日に行われた。再建というわけは、この銅像が大正8年（1919）に浅草神社の社殿をバックに西に面して建てられたが、先の戦争末期の昭和19年（1944）に金属類供出の命を受け撤去されたものを、この度復元したのである。

「暫」は本来芝居の本名題ではなく、主人公が「しばらく！」と声をかける所から出た俗称であること。悪玉に無理難題を吹き掛けられ、善玉の命は風前の灯と言った時に、主人公が「しばらく〳〵」と声をかけて花道へおどり出し、胸のすくような科白で悪玉をやり込め、成敗するという大筋は同じでも、場景は鶴ケ岡八幡宮であったり、鹿島神社になったり、主人公も鎌倉権五郎景政、朝日奈三郎義秀、大館佐馬五郎照時など、趣向と役名がその都度変わるという。

この銅像の「暫」は、この中の鎌倉権五郎景政を主人公にしたものである。台石表面の「市川團十郎」の銘は西園寺公望の筆になり、裏面の銘は森鴎外の撰文、中村不折の書というように、当時の一流どころがずらりと並んで参画している。

今回の新しい銅像はとても目につく場所に設置された。はとバスで来る乗客には嫌でも目に入るし、北へ行けばゴロゴロ会館や花柳界の見番があり、観音様の北参道ともいえる通りに面しているので、蕭條、清閑とした風情は昔に劣っても、当世風の陽の当たる場所に出たことになる。「暫」銅像の復元費用は松竹、成田屋、浅草観光連盟の三者が、それぞれ三分の一ずつ調達するということで進め、成田屋は十二代市川団十郎が中心となって寄付金を集めた。その経緯が『十二代市川団十郎襲名披露・松竹大歌舞伎特別公演』（昭和61年6月）パンフの表紙に《九代目市川團十郎「暫」銅像復元勧進興行》と銘うたれ、復元総費用見積額5千万円の募金、一口1万円から募って、十二代目が色紙にサインして差し上げたということが書かれている。

2 文化人切手

昭和25年（1950）9月に九代目の文化人切手が発売された。切手文化人シリーズ「九代目市川団十郎」の発行枚数は1、000万枚で、シートは20枚構成、暗い紫色の切手で、九代目市川団十郎の肖像と額面の「8円」などがデザインされている。これは日本切手のシリーズもののひとつで、以下の18名が登場している。「野口英世、福沢諭吉、夏目漱石、坪内逍遥、市川団十郎、新島襄、加納芳崖、内村鑑三、樋口一葉、森鴎外、正岡子規、菱田春草、西周、梅謙次郎、木村栄、新渡戸稲造、寺田虎彦、岡倉天心」

昭和24年（1949）年11月3日、第一回の野口英世切手発行以後、昭和28年（1953）11月3日発行の寺田虎彦と岡倉天心をもって18名全部が発行済みである。

切手となった18人の文化人は、まことに立派な方々で、明治維新から先の大戦の終戦までの我国文運の開拓者であり、指導者であり、いずれもその分野において功績と人格を讃えられた人物である。九代目は明治36年（1903）9月13日に茅ケ崎別荘・孤松庵で尿毒症に急性肺炎を併発し死去した。

九代目の臨終について『団十郎と菊五郎』（小坂井澄著　徳間書店1993）が次のように述べる。《容態急変したのは、8日のことだった。持病になっている尿毒症に、急性肺炎を併発していました。迫りくる臨終を前に家族が最後まで思い悩んだのは、団十郎に注射を受けさせるかどうかということでした。しかし、九代目は苦しい息でこう告げたのです。「おれはまもなく危篤になるだろう。危篤になっても、注射などはしてくれるな」言葉それだけですが、「死んでいく者は素直に死なせてくれ。自然に逆らってはならない」と言いたかったにちがいありません。それが団十郎の死生観であったのでしょう》

《12日の朝、いくらか気分がいい様子で、家人に手伝わせて顔を洗い、口をすすぎ、手を清めると、庭に設けた祠殿のほうに体を向けてもらいました。団十郎は中年から神道を奉じ、神習教の権少教正の位を受けているのです。うやうやしく礼拝をすませると、ついで法華経の自我偈を唱します。それきり固く口を閉ざし、翌13日午後3時15分、こと切れました。あの大目玉はおだやかに閉じられ、血の気の消えた顔には満たされた安らぎがただよっていました》

さすが九代目と感じ入ると同時に、鉄舟の死に準じているような気がしてならない。

鉄舟は、明治21年（1888）9月19日、午前7時半、浴室におもむき、身体を清めからかねて用意の白衣に着替えた。9時ごろ、一度病床に正座したが、すぐ立って四尺ばかり前方に進み、皇居に向って結跏趺坐した。9時15分、森厳な、はりさけるような空気の中、鉄舟は静かに瞑目大往生を遂げたのである。鉄舟は心なしか面に微笑を含まれ、手に団扇を握り、端然として趺坐してままであった。偉人の最期とはこのようなものであるのだろうか。

3 団十郎銘入り包丁

先日、天正元年（1573）創業の日本橋の刃物屋「木屋」で〝団十郎〟と銘を打った包丁を見つけた。店の主人が「大正時代に団十郎銘の使用許可を受けた」という。九代目が亡くなったのは明治36年、その後団十郎を襲名する役者がおらず、九代目の長女実子の婿となったのが堀越（旧名・稲延）福三郎、九代目没後の明治43年（1910）28歳のとき、突然役者を志し、大正6年（1917）11月、歌舞伎座で「矢の根」を演じ、五代目市川三升と改名した。素人の中年過ぎてからの役者修行で、評価は今一つだったが、昭和31年（1956）73歳で逝去。この告別式の当日、後継者の海老蔵（十一代団十郎）が故人に十代目団十郎の名跡を追贈した。この十代と追贈された三升から、大正時代に刃物屋が団十郎銘使用の許可を受けたものと推察する。この団十郎の包丁を購入しようと思い、家族や知人に話すと、全員が反対する。理由は「切れ味が素晴らしいはず。自分の手を切ってしまう危険がある。長年使っている切れ味が今一つの包丁が無難だ」と言う。これになるほどと思う。凡人の身、九代目に連なり、列する「団十郎銘」を冠むったものは確かにおこがましい。

これで鉄舟と九代目を終りたい。次号からは明治天皇と鉄舟についてお伝えしたい。

絹の話（139）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹生産の世界的広がり

ヨーロッパの絹生産

紀元前4世紀アレキサンダー大王の東征でヨーロッパ人が始めて絹と木綿に出会います。その驚きは如何ばかりか想像を絶するものがあったと思われます。

紀元前2世紀になるとシルクロードが開かれ、絹がローマにも運ばれ、古代ローマ帝国のカエサルシーザーが絹を着て見せると、その神々しい美しさにローマの貴族は魅了され、皆が競って絹を着る様になり、その需要は増すばかりとなりました。その頃絹はセレスと呼ばれ、歴代の中国はその製法の流出を禁じていて、西方の人々にはその製法はなかなか判りませんでした。

それでもシルクロードの往来が活発になった3世紀頃になると北バクトリア地方（現在の中央アジア方面）で養蚕が始まった様です。

5世紀にはエジプトのアレキサンドリアに絹加工の工場が出来たと言われますが、中国からもたらされる高品質の絹には及ばず、6世紀半ば東ローマ帝国のユスティニアヌス帝は中国に密使の僧侶を送り蚕の卵を持ち帰らせて、現在のトルコ方面に養蚕を伝え、急速に養蚕技術が各方面に広がって行きました。8世紀にはイスラム教徒が地中海のシチリア島に桑と蚕を持ち込み「シチリア絹」が特産になりました。

11世紀末、十字軍のエルサレムへの遠征で蚕の卵がコンスタンチノーブルに運ばれ中東の絹産業が盛んになってきました。

12世紀になるとイタリアのリヨン、13世紀にはジェノバ、14世紀になるとフィレンツエ、そしてフランスに広がり、15世紀にはミラノでも生産される様になり絹織物、染織技術が著しく発達しました。

16世紀になるとロシアにも広がり、遂にフランスの絹生産高が中国を追い越し、世界一の生産国になりました。

フランスの絹生産世界一の背景

ヨーロッパでは14世紀～16世紀にかけて宗教改革が起こり、大航海時代を迎えスペインのハクスブルク朝、フランスのブルボン朝など、各国に華やかな王朝が成立し、ルネサンスによる学問文化の興隆、新技術の開発などでメデイチ家に見られる様に商業活動が活発になり、華やかな人々の社交も盛んになって絹の需要が著しく増加した結果と思われます。

ヨーロッパの絹生産の終焉

19世紀になるとイギリスで産業革命が起き、インドからの木綿による繊維工業の発展には目をみはるものがありました。フランスでも動力による製糸工場が操業を始めていました。ところが世紀半ばになって南フランスで蚕に黒い斑点が出来て死んでしまう微粒子病が発生し、瞬く間にヨーロッパ全土に広がり壊滅的状態になりました。日本の幕府はフランスの要請を受けて蚕卵紙（紙の上に産み付けられた蚕の卵）をフランスに大量に送り、パスツールによってその病気が解明されましたが、さらに蚕の軟化病が発生して遂にフランスはじめヨーロッパの国々の養蚕の火は消えてゆきました。

日本の絹生産世界一

日本は江戸時代後期まで高級な絹糸はオランダ船を通じて中国から買っていました。その支払いにあまりにも大量の小判や銀貨の流出にたまりかねた幕府は中国からの絹の輸入を禁じました。すると高級織物が織れなくなった京都西陣織物の業者が私財を投じて高級な糸が出来る養蚕に力を入れ、渋沢栄一らによって優秀な蚕種を作ることに成功しました。明治早々フランスから富岡に導入した最新の製糸設備から出来る糸は日本の各地の手本となり、明治42年には中国を追い抜いて世界一の絹生産国となりました。第一次世界大戦後のアメリカの好景気で日本の絹がアメリカに大量に輸出され、日本の国家経済を支えました。１９２９年に始まる世界恐慌や第二次世界大戦で絹生産は激減しましたがその都度復活を繰り返し、戦後の化学繊維の出現と経済環境の変化により日本の絹生産は急激に衰えました。

低開発国に支えられる絹生産

20世紀末になると先進国の労働賃金の高騰、労働環境の変化により、労働集約型の養蚕業が世界的に衰退して低開発国に移行して行きました。

ブラジルでは１９３０年頃から日本人移住者によって養蚕が始められ第二次世界大戦後大きく躍進し、良質な生糸の産出でヨーロッパでも日本でも信頼される様になりましたが、経済環境の変化で今日ではブラジルの養蚕業は撤退を余儀なくされています。

今日世界の絹の60％強を生産している中国も養蚕地は雲南省など山間奥地に移行しています。

世界第２位の絹生産国のインドは独自の経済システムで南インドと東北インド中心に生産を伸張させています。

第３位はウズベキスタンです。

昨今はエチオピア、ケニアといった国々が養蚕に取り組み始めています。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2022年4月27日

今年はぎっくり腰が増える寒暖差です

気がつけば4月も終わりに近づいています
色とりどりの植物から青々しい緑へと変わって行きます
季節の変わり目と寒暖差といえば
ぎっくり腰　ぎっくり首　ぎっくり背中
いわゆるギックリ系が多く出始めます
これらを引き起こさない様にするには
23時までには就寝
1日8回以上の小便がでる水分量の摂取
鼻から5秒かけて吸い10秒かけて細く吐く深呼吸
寝る前に　ゆたぽん　を骨盤にかからないように
横向きに腰の下に置き
その後　お腹のヘソの下に横向きに置き小腸を温める
いわゆる　3S+ゆたぽん　です
他には　30分以上同じ姿勢にならない
食事は腹八分目にするなどを気をつけて行きましょう
動作に関しては
何かを持つ時や顔を洗う時など膝を曲げる事を意識して下さい
本田カイロプラクティックのにいらっしゃっている患者さんは普通の方に比べて健康値が高い為
ギックリ系になっても動けなくなるということはありません
といって無理して動かない様にしましょう
今日も笑いながら行きましょう

2022年5月6日

伝わる人には伝わる

朝晩は心地よい空気感で何ともすごしやすいですが
日中は初夏の陽射しです
寒暖差で身体に負担が・・・
と書いてきましたが
この気候を逆手にとり身体に良いように考えると
朝晩は涼しく睡眠をとりやすいし
日中の陽射しは免疫力を上げ骨を強くします
3S+ゆたぽん　の1つ深呼吸ですが
普段は湯船の中や就寝前にすることをお勧めしていますが
心地よい空気感の中
いつもより少し早く起きて朝日を見ながら深呼吸
というのもお勧めです

何でもそうですが
違う角度からみればこんなにも見え方に変化があります
今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」54

江　上　浩　二

ある意味では幸せな人生

令和四年四月に入って築百年以上と言われている平屋建ての「離れ」からなる宿に泊まる機会があった。もともと西武系の企業が所有していたらしく、庭の手入れも行き届いて芝や木々も山間の地形に相応しく、昔流に言うと湯治にゆっくり日にちも数えずに休んで、楽しみたいという処であった。

さて、ここからが舞台の幕開けで、その離れ宿に入りますと、玄関の引き戸の鍵が真新しくはなっているのだが、方式は古いものであった。畳敷きの二間の空間は全て襖で仕切られている。私の背丈は１８０㎝はないが、立ったままだと四畳位の玄関へ連なる小部屋と大部屋を仕切っている襖の取っ手に自分の手が届かない位低い所にあるのだ。そうだ、無作法に立ったままで襖の開け閉めをしてはいけないので、一度跪いて座るように腰を下げるとぴったりの高さに設計されているのだ。　次の大広間を見ると本当にただの畳敷きの部屋で椅子などはない。さすがに和風の卓机と座る時の背もたれは用意されていた。部屋の見分として、玄関から部屋に向かわずに板張りの廊下を左に行くとトイレ（便所、厠、御不浄等々の名称があるがあえてトイレと言葉を使った）があり、和風の板張りの空間で結構広く便器は流石に現代風のウォシュレット付きのものであったが、手を洗う水道は蛇口でなく、吊り下げ式ブリキ桶で下にあるネジを捻るとお水が適量流れ出てくる手水鉢のようなものを再現した古い仕掛けのものが残されていた。今回の宿でこれが私には一番気に入った。さらに一～二歩先は風呂場で脱衣所と浴室（洗い場と湯舟）になるわけだが、湯舟は石造りで温泉の源泉がゆっくりと出てくる。決して広くはないが百年前の日本人規格には十分であったと思う。

私はこの数年来腰痛と坐骨神経痛に悩まされ、久しぶりに東京から近い温泉場に浸かりに来た訳だが一番の大敵は中腰状態で、それを避けるには立ったままの方が楽で、加えて椅子に座れば比較的普通の状態で維持できる。その離れの造りは鴨居も低く私が立ったままで手を少し伸ばせば簡単に掴まれる位である。さて、庭を散策しようと玄関に向かうと靴を履こうとして靴ベラを探した。無いようだと思い、一瞬腰を曲げようとしたら白い長さの短いプラスチック状のものがあり、それが靴ベラであった。普段自宅では柄の長いほゞ立ったままで使える靴ベラを使っているので無意識に柄の短い靴ベラという概念が消え去っていたのだ。百年以上も前にこの離れで

お客人を接待もてなしていたであろう小柄な日本人は何の不自由もなく、立ったり座ったりして、ふすまを開け・閉め、お出かけのお客人も玄関先に座って柄の短い靴べラで十分な健康人であったに違いないと信じている。それに比べ、むやみに体格が良くなった現代人は胡坐をかいて畳に坐ること・こじんまりとした椅子に腰かけることや低いテーブル・洗面台の前にして中途半端な角度に腰を曲げたり、腰痛を発生させる機会が多いと感じているが、そうかと言って、大きな椅子、サイズを大きくしたテーブルや洗面台は規格品でそう容易く規格変更も出来ない。

約百年前の日本人の寿命は42－43歳、偶然にも１９２０年に第一回の国勢調査が行われ正確なデータが残っている。体格・背丈はと調べると、当時の二十歳の男女で１６０－１５０㎝、40歳代の大人は１５０－１４０㎝台半ばでさらに小柄で、日本人が縄文・弥生・古代・近世時代と変遷する間で一番小柄だったという江戸時代を引きずっているように思われる。最近の寿命は女性で八十歳の後半に入っているようだが健康寿命は平均して十年は短い。という事はその十年間は如何様な状態なのかという事を議論する必要があろう。老いが迫り、認知能力も体力・機能低下も同時に起きてくればこれは単に病を治療することではなく、痛み・苦しみ・悲しみ等々との対峙である。人生五十年、還暦（六十歳）を迎えられることが最大のお祝い事だった時代に生きた人々は他の感染等の疾患には相当悩んだにはちがいないが、現代の高齢者が遭遇する十年以上の＊torture も無く、高度成長期にイケイケどんどんと満身創痍で家庭を顧みず仕事だけに立ち向かい、ストレス多き環境を経験した世代にとってその torture が二度目の長きストレスになることにも関係無く、ある意味では短くとも幸せな人生を過ごせたのではないかと思った次第である。

＊torture, 長らく米系外資系企業に勤務していた時に本社のマネージャが日本人相手の仕事は torture だよと度々言っていたことを思い出して引用した言葉である。辞書的意味：拷問、罰、もともと捻られる捩じられるという責め。

初狩便り（7）

花野みぷり

沢瀉（オモダカ）

田水をたっぷり吸い太陽の光を浴び、稲がすくすく成長する様子は幸せでうれしい。しかし良く見ると稲以外の田草も負けずに育ち、田にも畦にも攻め込んでくる。田草の一つのオモダカは、白い可憐な花を咲かせ、矢じり型のような三角の葉は変わっていて面白い。その姿は美しく平安時代より詩歌に詠まれ、水盤で育てられ、茶花としても愛されてきた。

だが私はオモダカが嫌いである、敵と思っている。稲株のなかに入りこみ、小さいうちは稲と似た葉の形をして、すまして育つ。オモダカは成長が早く稲より高く図太くなり、花を咲かせ実をつける…が、そうはさせない。

農薬を使わない私たちは田草退治を人力に頼るしかない。身体をふたつに折り、夏の太陽のもとでの田草取りは辛い。三〇分もすると汗が噴き出る。Tシャツは汗で重くなり、身体にまとわりつく。稲が田草に勝ち青々と生い茂り、水面が見えなくなる状態を「青田」という。ここまで育てば稲は自力で伸びていく。米づくりのなかで一番辛い労働から解放される。

（写真・菅野昌英・他）

『少子高齢化』

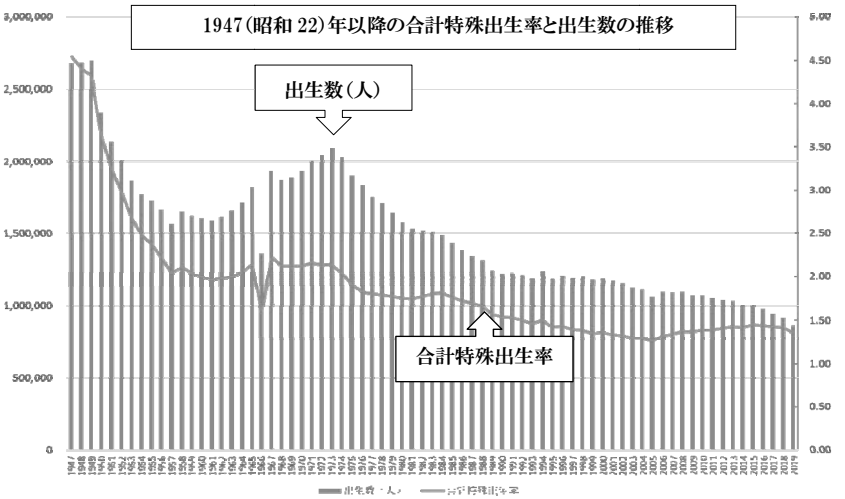
中屋保之

富山県富山市の北部に「岩瀬」という小さな港町がある。かつては富山港線と呼ばれていたローカル線の終点に位置している。江戸時代に北前船の寄港地として栄え、最近は観光地として整備されなかなか風情のある街並みで人気を呼んでいる。

その街で小中学校の再編を巡って、地元住民と行政との間で騒動が起こっているという報道が目にとまった。《少子化》を象徴する出来事で、そう珍しいニュースとも言えない。が、事はそう簡単に片づけてはいられない国家的リスクを内在していると思われる。アメリカの実業家、エンジニア、投資家であるイーロン・マスク氏が『出生率が死亡率を超えることがないかぎり、日本はいずれ消滅するだろう。これは世界にとって大きな損失になる』とツイートしたように、事は深刻といえる。

少子化とは、合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に産む子の数）が人口置換水準（人口統計上の指標で、15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの）を相当長期間下回っている状況のことをいうそうであるが、大雑把にいえば、合計特殊出生率が「2」であれば人口は横ばいを示し、これを上回れば自然増、下回れば自然減となる。一九四七（昭和22）年より生じた第一次ベビーブームの頃には期間合計特殊出生率は4・5以上の高い値を示したが、その後出生率が減少し人口減少が起こるとされる水準（人口置換水準）を下回ってきている。因みに、一九六六（昭和四十一）年は丙午（ひのえうま）で前後の年よりも極端に少ない1・58であった。

わが国で、少子化が注目を集めだしたのは一九八九年の「1・57ショック」以降だそうである。その後も徐々に数値は減少してゆき、二〇〇五（平成17）年には1・26にまで減少した。二〇〇六（平成18）年以降はやや上昇方向へ転じたものの、二〇〇七（平成19）年からは、合計特殊出生率の上昇にもかかわらず、出生数が減少傾向に向かい、二〇一六（平成28）年以降は百万人を下回り、更に団塊ジュニア世代の駆け込み出産も終わった二〇一九（令和元）年には、出生数が86万人台と初の九十万人を割り込んだ。これは、出産が可能な女性の総人口が減少していることによるものとされる。二〇二〇年の少子化社会対策白書では、現状を「86万ショック」と呼ぶべき状況であると、初めて危機感が表現された。



さて、「少子高齢化社会」の、《高齢化社会》とは65歳以上の高齢者の割合が「人口の７％」を超えた社会を指す。一九五六（昭和31）年の国連の報告書において、７％以上を「高齢化した（aged）」人口と呼んでいたことが由来とされる。我が国では、一九七〇年に高齢化率７・１％を超え、高齢化社会を迎えている。65歳以上の高齢者の割合が「人口の14％」を超えた社会を《高齢社会》と呼ぶ。14％というのは、高齢化社会の基準である高齢者割合７％を二倍にしたものである。日本では、すでに一九九五年の時点で高齢化率１４・６％を超え、高齢社会に分類される。更に、高齢社会が進行し、65歳以上の高齢者の割合が「人口の21％」を超えた社会を《超高齢社会》と呼ぶ。人口の21％とは、高齢化社会の基準である高齢者割合７％を三倍にした数字となる。日本では、二〇一〇年には高齢化率が23％を超え、超高齢社会を迎えている。

イーロン・マスク氏が指摘したように、この年から出生数が死亡数を下回り、総人口が減少している。総人口が減少する中で65歳以上の割合が増加しており、二〇三六年（令和18年）までに３３・３％、二〇六五年（令和47年）で３８・４％に割合が上昇する見込だという。然るに、政治・行政は有効かつ十分な施策を見出せずにいるように思われる。

「日本はいずれ消滅するだろう」だけは、あってはならない。

退院して台桜を賞す

花発いて春風　台上に軽く
天晴れ禽語　樹間に清し
病棟虚空　此の景を思う
正に主人を待つ　繚乱の桜

退院賞臺櫻

花發春風臺上輕　天晴禽語樹間清
病棟虚空思此景　正待主人繚乱櫻

桜台楼主人・精真

（語釈）○台桜…台はテラスのことで、テラスを掩う桜。○禽語…鳥の鳴き声。

※「春花発く処 正邪絶ゆ」と夏目漱石が詠っているが、桜の花の下にいると正も邪もなく人の心を包んでくれる。この句に出会ってテラスの上を掩わんとしていた庭の桜に一層の愛着を持った。そして一年中桜の樹を相手に過ごしている。

庭の桜が今にも咲くかと思えた三月十九日に下血した。その日は全国研修会だった。睡眠をしっかり取れて目覚めの良い朝だった。食後、声をならし、いざ出発と言う時にトイレに入ると下血が始まった。丁度七年前の旅先高知での朝と同じだった。何故？調子の良い朝を迎えたのに！兎に角出かけたが、やはり周りの人に迷惑かけるだけであった。会場から救急で運ばれ入院だ。憩室症は繰り返し発症する。これで五回目か。今回は今迄御世話になった病院とは違って川崎市立病院に送り込まれた。不安だったが落ち着くと、好感と安心感の持てるドクターと看護師さんに恵まれているのを感じた。二十四時間体制の看護師さんには入院の度に御世話になり感謝の念が深い。

留守番の娘に「桜が開いただろう。私の代わりに枝に触れてよく咲いたねと言ってくれ」と頼んだら、寒が戻りまだ開いていないという。退院帰宅した翌二十七日にはぱっと咲いてくれた。この景色を病棟で思い描いていたのだ。丁度私を待つような形となった。

令和四年三月二十七日

平原（パンパス）

今泉由利

頭をめぐらせ靉靆　寸心を知る
亜国　天の一涯かと　最も遠い
満目　韶華　芳草の地
想又　地球圓を　信頼す

頭翹靉靆寸心知
亜国最遠天一涯
満目韶華芳草地
想又信頼地球圓

語釈

霞靉＝はるかかなたにたなびくさま

亜国＝アルゼンチン

最遠＝もっとも遠い

天一涯＝宇宙かと思うほど

韶華＝春の光にみちる

満目＝一面

信頼＝たのもしい

通釈

アルゼンチン、ウルグワイ、ブラジルを流れる

ラプラタ川の流域に広がる大平原。

小麦、トウモロコシ、アルファルファ…栽培し

パンパスグラスが栄える、大牧畜地域。

地球の上に、こんなに素晴しい所があることを思うと、

とても幸な気持ちになるのです。

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「耳とみそぎ」

耳を注ぐはミソギなり
禊は清めて　取り戻す
本の自分を取り戻す

耳は脳と繋がりて
生まれる前から　音を聴き
その場を捉えて　本能に
息吹を与えて　動き出す

聴くは精の力なり
生きる限り働いて、
命を動かす源なり

自然の声にゆっくりと
耳を傾け、三十分
聴けば頭が落ち着くぞ
脳も心も身体も
全てが整い　元気になる

都会の騒音、突然に
鳴ったり止んだり忙しく、
騒音頭に影響し、乱れて心身混乱す

自然の音は、止まらずに
虫の声、鳥の声、風の声
木々の声から、波の声、
高い周波の倍音が 豊かになって 響き合う
音同士が会話して、声となって 伝えておる

自然の声が聞こえれば、本
能・直感働くぞ
自然や宇宙の移ろいや、
生命の未来が見えて来る
生きてく先が見えて来る

自然に耳を傾けて、耳を注
いで禊となる、
禊は清めて　取り戻す
本の自分を取り戻す
今こそ本能取り戻せ

「梅雨湿気は潤う気」

梅雨は湿気の季節なり
湿気は土気土気、大地の気
春の陽気を受けて出る
天気に蒸されて湧き出る気

湿気は大地を育む気
万物潤し、養う気
草木　植物潤って、
生き物　元気が湧き出てくる

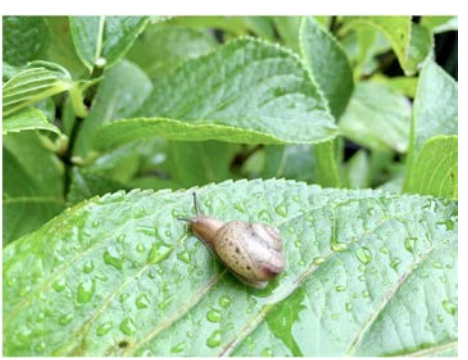
湿気は不快の気となりて
皮膚にまとわり　汗出でず
ねっとり皮膚にからまって
着るものじっとり　おもくなる

出でぬ汗肌で留まって
発汗できずに浮腫むなり
発散できぬは熱こもり
煩して、悶えて悶々と
眠りも浅くなりがちで
日々の生活　淀むなり

動けば適度に発散し
体温上がれば汗が出る
発散　湿気を退けて
むしろ肌が潤うなり

肌での湿気の停滞は、
皮膚を潤す役目あり
梅雨の後には夏が来て、
汗かき、潤いなくなるぞ
湿気は潤い大地の気
皮膚潤えば、余力となる

一年通してこの時期が、
肌を潤す時となる
梅雨は湿気の季節なり
生命の潤い保つ時



「氷魚」のことから（256）

岡本八千代

昭和30年頃のこと―。

あの頃の八兵山はまだ、松も枝も疎らで枝も小さく長い草々の葉が生いしげっているだけだった。

私は形原中学校に勤めていたが、結婚しても教師生活を続けるためには、当時は親に子供の世話を頼むよりほかはなかった。

かくして、私は西浦に住む親にお願いした。そうして、西浦小学校へと転校した。やはり男女共学であった。私は小学五年生の担任であった。給食はまだ無い頃であった。

五時間の始まるベルが鳴ったので、私の受け持ちの生徒の教室へ来たら、生徒たちは一人もいない。女子は裁縫室へ。男子も一人も居ない。黒板に貼り紙がしてあっただけ。

貼り紙には、「先生、電信棒の貼り紙に沿って来て下さい」と書いてあっただけ。私はびっくりして、驚きと心配やらで、胸がどきどきしながら八兵山へ登って行った。学校との距離はあまり無いはずなのに、私は、何か怪物でも出て来そうにも思えてきた。

やっとのこと、たどりついてみたら、居た居たわが担任の五年生の男子生徒らが…。私は、ほっとした気持ちやら、怒れるやらで泣けてくるほどだった。…しかし、だんだんと落ちついた気持ちになってきて、ついにいつもの私のようになってきたらしい。彼らとの会話がはずんだのであった。

思い出せば私は、生徒たちに、白虎隊の話をしたことがあったっけ。生徒たちはそのかの真似をしたかったらしい。生徒たちも非常に敏感で、おそろしい。とつくづくと思ったのであった。男子生徒と、女子生徒とはちがった受け止め方が発展してゆくものだとも思ったりした。

現在の男女共学のむずかしさにも気がついてまだまだどうあるべきかにはなれないものか？教師としての職業からはかなり遠ざかったつもりではあるが、私の日常生活で、いろいろひきかかるものができてきて、苦しいものが生じてきたりする。そのたびに不安な気持ちになったりする。そうだそれが人間というものなんだ。いいではないかと自分で自分を許して心落ちつくものなんだ。…。

そうこう考えたりしているうちに、私は生徒たちのありかを発見したら、また急に落ちついたりして、彼らとの会話の中に交わってゆくことができた。あの八兵山の草芒々の中で、彼らと話のできたことを思い出したのであった。

男女共学のはじまったばかりの私の思い出の一つでもある。

現在は、八兵山に西浦中学校がある。かくして季すぎて、私はその中学校へ勤めたのであった。その思い出もいつか書けるときがきたら書いておきたいものだけれど。

西浦に産まれて、西浦に勤めることの幸わせを今以って感謝する私である。

グッドバイ。八兵山よ。

編集室だより【二〇二二年四月】

今泉　由利

○アルゼンチン国ブェノス・アイレス市へ、訳知らぬまま、とにかく父母が用意して下さった日本の品々を後生大事に船に積み込み、地球の果て、と思う遠くまで、出掛けて行ったのだった。道中、自分の全部の物と一緒に、船に乗っているのは、安心だった。
そして、アルゼンチンでの生活で、増え続けた品々を加えて、日本へ持ち帰る引越しをた。

○その時に、持ち帰った宝物達が、今、一番新しく引越してきた恵比寿の家の、大きな真白い壁に、ぎっしり治まった。
アルゼンチンに住み続けているような、そんな気持になってしまう。

○アルゼンチンの暑い地方に、すくすく育ったパロ・バルサ（模型飛行機を作る軽い木材）を、刳り抜いて作った、その地方の動物達のお面。収穫を祝う、カーニバルに大活躍をしたのでしょう。

○どのお面を、いつ、どこで、どんな情況で、私の宝になり…日本まで連れてこられてしまって…。一つ一つのお面が饒舌におしゃべりしてくれます。私も、生き返ったようにお面達とテレパシーを交わしています。

○もう家の中の何処も、何も置けない感じだけれど「あの子が居ない」。まだ幾つも封のままのダンボール箱があるから…はやく出してあげなくては！

○昔、日本の鉄道の枕木にしたという、とても固くて強い木材で彫った、アルゼンチンの地方の動物達も大勢連れてきたのに、まだ、ダンボールに入ったまま。もっと大きな家に移らないと、出せないのかもしれない。

○一緒に日本に来てくれた、動物達や玩具達と、いっぱいお話をし、テレパシーを通わせて、忘れていたことは思い出し、知らなかったことがあることを教えてくれて…。毎日がうれしくて仕方がない。楽しくて仕方がない。アルゼンチンで暮した、全部のことを、身近に引き寄せて、大切で、大切で仕方がない。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　〇九〇-八四三四-八六四六
ＴＥＬ　〇三-六七六五-五八三八
◇ＵＲＬ　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利